



上川井だより

平成 29 年 11 月 30 日
横浜市立上川井小学校
校長 山田 アイ子

12月号

「あつまれ わんぱく」

校長 山田 アイ子

今から30年以上も前に担任した教え子たちが、同級会を開いてくれました。初めての1年担任だったこともあり、忘れられない思い出が、たくさんあります。

当時は5月29日の横浜大空襲について、発達段階に応じて話をする時間があり、私は「かわいそうなぞう」の読み聞かせをしました。「かわいそうなぞう」は、児童文学作家の土家由岐雄さんの作品で、今も、多くの人に様々なことを考えさせる話です。「太平洋戦争中の上野動物園では、空襲で檻が破壊された際の猛獣逃亡を考え、殺処分が決まりました。ライオンやクマが次々と・・・残るは象のトンキーやワンリーだけになりました。象に毒の入った餌を与えても、吐き出してしまいます。毒餌を食べないので、毒入りの注射を試みても、象の硬い皮膚には注射もできません。最終手段として、餓死するのを待つことにしました。象たちは餌をもらうために、必死に人間が喜ぶ芸をするのですが、ついにワンリーもトンキーも…」と、読んでいる途中から、泣き声が聞こえてきました。机に顔をつけたまま「ぞうさんがかわいそう…」と言って、ずっと泣いている姿を見て、もらい泣きをした子もいました。どんなに叱られても、毎日、喧嘩が絶えない子どもたちでしたが「かわいそうなぞう」の話を聞き、切ない気持ちになっている姿を見て、私は何も言うことができませんでした。

その子どもたちを担任していた時に、発行していた手書きの学級だよりを、持ってきてくれた子がいました。学級だよりのタイトルは「あつまれ わんぱく」です。自分が書いた学級だよりなのに、何を書いたのかすっかり忘れていました。「話を聞かない子が多くて困ります」「忘れ物が多くて困ります」「給食の好き嫌いが多くて困ります」と、私が困っていることばかりを羅列している学級だよりでした。自分の指導の至らなさを反省するよりも、自分は、こんなに一生懸命に指導しているのに、子どもたちが、ちゃんとやらない…そんな刺々しい気持ちが伝わってくるようで、読むのが恥ずかしくなりました。同時に、そんな学級だよりなのに、今も大切に保存してくださっている保護者の方に対して、感謝の気持ちでいっぱいになりました。温かく見守ってくださる保護者の方に、支えられていたことに、30年以上も経って、あらためて気づきました。

「わんぱく、という言葉は現在では使わないよね。もう死語かな」と、当時、最もわんぱくだった子に言われ、「えっ？」と思いつつ、わんぱくさんが立派な大人になったことを、心から嬉しく思いました。

私が1年生担任をしたのは、後にも先にも、この1回だけです。自分が親になったときに、今度1年生を担当する機会があれば、きっと、もっと温かい目で子どもたちに寄り添いたいと思いました。自分自身も経験を重ね、「子どもの成長を待つ心のゆとり」もあるはず…でしたが、残念なことに、その機会はありませんでした。

家に帰り、入学記念の集合写真を引っ張り出しました。30年経っても、ずっと1年生のままだった教え子たちの顔が、同級会を開いてくれたことによって、40歳の顔に書き換えられました。「この仕事に就いてよかった！」と、心から思いました。

「ありがとう わんぱく」「また あつまろう わんぱく」